

＝ 市史編さん便り ＝ 【61号】 令和6年1月31日(水)発行

*****土佐清水市教育委員会・市史編さん室

金剛福寺にて防火訓練が行われる

～文化財防火デー～

毎年1月26日は「文化財防火デー」である。世界最古の木造建築「法隆寺」が炎上し、壁画も焼損した日として文化財の消火訓練が行われている（文化庁HPによる）。

同月30日、土佐清水市では四国霊場第38番札所金剛福寺において、金剛福寺・消防本部・文化財保護審議会・生涯学習課によって消火訓練を実施した。

当行事では、金剛福寺本堂から出火した想定で行われた。副住職による消防署通報に始まり、駆け付けた本堂への放水を行った。次に消火器の使用法と諸注意を受け、金剛福寺及び文化財保護審議会委員による消火器による消火訓練を実施した。

【写真】 金剛福寺本堂に放水する消防隊員



保育園に獅子舞がやってきた！

～伝統芸能 存続のかたち～

市史編さん室職員 吉本 工心



きらら清水保育園での演舞

きらら清水保育園に、中浜からきた 2 体の獅子が躍動した。髪をふり乱して舞う獅子に約 100 名の園児たちは息をのみ、ときに歓声があがった。

約 12 分の演舞が終わると、汗をしっかりと含んだ獅子の前に園児たちの列ができた。その一人ひとりに対し、一年の健康と、将来が幸福であるようにとの祈りをこめて、差し出す頭に獅子はかぶりついていった。

園児のほとんどは怖がることもなく、むしろ好奇につぶらな瞳を輝かせていた。なかには獅子の頭を撫でてくれる園児もあった。



中浜の獅子舞と保育園の関係

中浜において、獅子舞と保育園は互いに支えあう存在であった。休園前の中浜保育園では、卒園式のプログラムのうちに卒園生による獅子舞の披露が入り、式に花をそえた。「自分た

ちが育った地区の伝統芸能を子どもたちに触れさせたい」という当時の中浜保育園長による発案だったようである。

式に向けて卒園児は獅子を被り、保育士の方は鐘を稽古した。筆者もその園児のひとりであった。指導者のひとりであった父に連れられて、年末の獅子舞の稽古を見学していて、保育園バッグを獅子頭に見立て踊っていた記憶がある。

年少組の園児たちも卒園するお兄ちゃんお姉ちゃんの演じる獅子舞を見て、鐘の響きを体に染み込ませながら、憧れの視線をなげかけていた。



中浜・大浜の子どもにとって、獅子舞はそうした幼い頃から染みついた記憶であった。小学生になると、正月に行われる本格的な獅子舞に任意で参加する。すでに舞の基礎的な所作や鐘のリズムは、保育園で習得を終えて参加するのである。

伝統芸能の現在

中浜の正月に興をそえる獅子舞は、毎年1月3日に行われる行事である。朝いちばんに中浜の産土（うぶすな）である音無神社に舞を奉納したあと、二手に分かれて家々を廻り、最後に区長場前の広場で地区中の人々が一堂に会するなか、大団円を迎えるのが恒例となっている。

中浜の獅子舞の構成は5つの役に分かれる。中高生が主役となる獅子、大人が担当し音頭を主導・調整する鐘、小学生が演じる笛、太鼓、鈴がそれである。すべて揃えれば、およそ11名、最大なら17名の役者が必要になってくる。鐘をのぞけば、いずれも小中高生によって演じられるものである。

土佐清水市の人口はついに12,000人を割った。少子高齢化、また保育園や学校の統廃合の波の周縁で、地区と子どもの結びつきもまた薄まっていくのではないか、そんな危惧が去来する。

黒潮おどる太平洋 岩にくだける波の花
げんぜんそびえるとんびばえ 荒れる風にも立ち向かう
清く明るくたくましく 育つわれらの^{まなびや}学舎は
あい 中浜小学校

「中浜小学校歌」より



とんび磐

幼少期に覚えたものは時を経てなお消えないものである。よくよく歌詞について考えることもなく歌った当時の校歌は、ふと思い出すまますみさんでみると、潮の香の気配ととんび磐の雄姿が脳裏に立ち上がり、まざまざと中浜の風景をよみがえらせる。伝統芸能もこれと同じく、巣立った人の身心に深く刻みこまれ、やがて郷愁とともに底のほうから精神と郷

土との結びついた追憶として噴出するものになるのではないか。

小中高生が主演となって演じた中浜の獅子舞は現在では衰退し、少ない有志によって辛うじて存続している状況であり、上述したような完全なかたちで演じることはできなくなっている。

存続のかたち

そんななか、きらら清水保育園の保育園長の希望によって、ここ数年、中浜の獅子舞のために舞台を用意してくれている。今年は完全に近いかたちで園児たちに披露したいという保育士有志の希望も加わり、保育士の方にも演者になってもらい、年末の中浜での稽古と保育園のための稽古にも積極的に参加していただいた。その甲斐あって、このごろになく笛、鈴がつき、太鼓は4人いるほとんど完全なかたちで獅子舞を演じることができた。

イベントが終わって、手を振りながらそれぞれの部屋に戻っていく小さな団体のひとりが、道をそれてこちらに駆け寄ってきた。その彼の言葉が印象深く残っている。

「今日は獅子舞をしてくれてありがとう。獅子舞は迫力があってかっこよかった。太鼓の音も大きくてすごかった」

園児からそうした言葉が聞かれることは、演者にとってこの上ない喜びだ。「子どものころからやっているから体が覚えていて、すぐに踊れるんだよ」というと、その子がいま習得していることを例にしながら「大人になってもそれを忘れないってこと？」と尋ねた。「きっと忘れない」と答えた。「獅子舞はね、君たちにも踊れるよ」というと、目を丸くして輝かせた。彼はありがとうと言いハイタッチをして部屋に戻っていった。

民俗芸能は舞台と客席に二分されるものではない。誰でも参加できて、誰もができるようになる、そうして演者と観客が混ざり合い、継承されていくものなのだ。その園児の言葉と表情は私たちにそう教えるようであった。伝統芸能の未来は、光を爛々と跳ね返す少年の瞳のなかに眠っているのである。

